

7 コンテクスト重視のアプローチ

書き言葉によるコミュニケーションでは、言葉の解釈は読み手に委ねられている。つまり、言葉自体には様々な解釈が可能であるが、その中から適切な解釈を読み手が行っている。一方書き手は、読み手が求めていると思われる情報を選択し、それを適切な形式で表現する。このことは、書き言葉によるコミュニケーションが、書き手と読み手による相互の影響を受けながら行われていることを意味している。

文章を読むことは、受動的な動作だと思われる傾向がある。しかし実際には、読み手は先行知識の集合体である **スキーマ (schema)** を活用しながら、能動的に文章を理解している。つまり、個々の単語からテクスト全体に至るまで段階的に理解していくことに加え、スキーマに基づいて文章の補足や予測を行いながら、積極的に内容の理解に努めるのである (卯城, 2018)。また、読み手は自らが属するコミュニティの中で様々な知識を得ることで、スキーマを形成する。したがって、適切にコミュニケーションを行うためには、読み手がどのようなコミュニティに属し、どういった知識を持っているのかを予測しながら文章を作成することが必要である。以上のように、コンテクスト重視のアプローチでは、ライティングによるコミュニケーションに関わる社会的な要因に焦点が置かれる。

コンテクスト重視のアプローチは、1980年代後半頃から注目を集めようになった。これには、プロセス・アプローチでは、書き手によりプロセスが異なるという点が考慮されていないことに批判があがったという背景がある。さらに、高等教育機関で ESL ライティングに携わる指導者からは、読み手の存在が軽視されているという指摘がされるようになった。こうした指導者は「アカデミックな目的のための英語 (English for academic purposes)」を目指す指導の必要性を唱えるようになり、新しいアプローチを求める機運が高まっていった (小室, 2001)。

コンテクスト重視のアプローチとしては、ジャンルに基づいて指導を行う **ジャンル・アプローチ (genre approach)** が知られている。Ferris and Hedgcock (2014)によると、ジャンルの定義は多岐に渡るもの、ある社会的コンテクストにおいて繰り返し使用される特徴的なテクスト (Polio & Williams, 2011) であるという認識は広く受け入れられている。これは、特定のコミュニティにおいて、共通する目的によって作成されたテクストには類似した特徴があるという前提に基づいている。例えば、学術論文は、特定の学術分野に関心のある人々が属するコミュニティにおいて、新たに実施した調査に関する批判的な評価を受けるという共通

の目的に基づいている (Maswana, Smith, & Tajino, 2015)。そのため、学術論文には様々な共通の特徴が見受けられる (Swales, 1990; Swales & Feak, 1994)。一方読み手は、これまでに触れた類似のテキストと関連付けながら、書かれた内容の意味を理解する。この性質は**間テキスト性 (intertextuality)** と呼ばれ、テキストが単独ではなく、社会の中で有機的に機能していることを表している。つまり、意図する内容を読み手に適切に伝えるためには、特定のコミュニティ内で広く認識されている特徴を有するテキストを作成する必要があるということである。

Hyland (2016) は、効果的な学習を行うためには、学習者同士が協力し合うことが必要であるとしている。また、教師などより知識がある人物から支援を受けることで、一人では達成できなかった学習内容を成し遂げることができるようになるとしている。このような支援は、**足場掛け (scaffolding)** と呼ばれる。これらを踏まえ Hyland は、ジャンルに基づくライティング指導法の1つとして Teaching-Learning Cycle (Feez, 2002) が有効であるとしている。これは、5つの段階に基づいて行われる指導法である。1つ目は、対象となるジャンルの目的とそのジャンルが使用される状況を明らかにする段階 (Developing the context) である。2つ目は対象となるジャンルの分析を行い、その特徴を明らかにする段階 (Modelling & deconstructing the text) で、3つ目には教師からの足場掛けを受けながら練習が行われる段階 (Joint construction of the text) がある。そして4つ目に教師に見守られながら、学習者自身でライティングを行う段階 (Independent construction of the text) がある。最後は、学習した内容を他のジャンルと比較することで、それらの類似点や相違点を明らかにする段階 (Linking related texts) である。なお、全ての段階を順番に行う必要は無く、不要だと思われる段階を飛ばすことも、必要に応じて前の段階に戻ることもできる (Hyland, 2016)。そのため、学習者の習熟度や授業の進度を考慮し、柔軟に適応させることが可能である。

以上のように、コンテキスト重視のアプローチは、ライティングによるコミュニケーションに関わる社会的な要因を考慮したアプローチである。このアプローチに基づく指導法の効果の検証は行われているものの (Kamimura & Uehara, 2020), 未だに明らかにされていない点は多い。特にライティングに関わる要因は多様であり、今後さらなる研究が必要となるであろう。

(上原 岳)